



小越 和栄●著

消化器内視鏡リスクマネジメント

金子 榮藏(浜松医大名誉教授・内科学)

すばらしい本が出た。消化器内視鏡の分野で長年指導的活躍をされてきた小越和栄先生による『消化器内視鏡リスクマネジメント』である。著者は ERCP の開発者の一人であり、日本消化器内視鏡学会の各種検査やリスクマネジメントのガイドライン作成において中心的役割を果たし、さらに学会が5年ごとに行っている偶発症全国調査の委員でもあった。

全国集計のデータにみるように、内視鏡の分野は常に事故の危険をはらんでいる。高齢化社会になり、かつ消化器内視鏡の目的が、診断から治療へと大きくシフトしつつある昨今、偶発症の危険は今後さらに大きくなる恐れがある。そのような背景があって消化器内視鏡学会が作成してきた、安全に内視鏡検査を行うためのガイドラインも「消毒法ガイドライン」に始まり、最近の「抗凝固剤、抗血小板薬使用に関する指針」までの6つで一応の区切りをみた。この時期にこれらすべてのガイドライン作成にかかわり、その多くで委員長を務められた著者が、ガイドラインをより深く理解し、より良い利用法を目指して本書を著したのは極めて大きな意義を持つものである。

全体の構成は、「内視鏡医療でのリスクマネジメント」「インフォームド・コンセント」「消化器内視鏡機器の洗浄」「内視鏡検査前の準備、前・後処置」「内視鏡治療時の抗血栓療法症例への対応」「呼吸・循環動態モニタリング」「術中の注意および事故防止策」「臨床に必要な法律」の8章に分かれている。

内容の一部に触れると、はじめの2つの章ではガイドラ

インと医療水準の意義、インフォームド・コンセントのあり方と法的根拠などが、インフォームド・コンセントの具体的な例とともに示される。つづく「消毒法」では、学会のガイドラインが up-date され、最近の過酢酸や酸性電解水なども含めたすべての方法の得失が詳細に述べられ、安全な消毒室の設計にも触れられている。「前処置」では、降圧剤などの検査当日の服薬への対応、消泡剤の効果的な使用法、咽頭麻薬、鎮静剤の安全な投与法などが示され、日常ルチンに行っている手技でもさらにより投与法のヒントが得られるであろう。「抗血栓療法剤」では、欧米人と日本人の抗血栓剤に対する反応性の違いから、わが国独自のガイドラインが作成された経緯と服用者への対応が具体的に示されている。

全体の記述は極めて実践的であり、さらに各章の終わりには要点が Q&A 形式でまとめられ、理解をより容易にしている。日ごろ疑問に思っている点の多くが本書によって解決されることは間違いない。

著者が述べるように、ガイドラインは単に事故なく検査を行うためだけのものでなく、質が高くかつ患者が満足する医療を提供するための指針である。本書を通読し、筆者も教えられることが多々あった。本書は、消化器内視鏡に携わるすべての医療者の必読の書であることを強調したい。

B5・頁 144・定価 4,200 円(本体 4,000 円+税 5%)

2008 年 [ISBN978-4-260-00604-0] 医学書院刊